

Information & HIROBA

各地の活動レポート

●あいさつで心の距離を近づけよう

北海道岩見沢支部（事務局：岩見沢市教育委員会）より、南小、明成中、北村中のあいさつ運動報告が届



ソーシャルディスタンスをしっかりと保っています（北村中）

紙芝居を動画配信

●おうち時間を楽しんで

子どもたちの豊かな心を育てる活動に、紙芝居の上演で協力してくださっている声優の永澤菜教さん。永澤さんは、外出自粛が要請される中、子どもたちにおうち時間を楽しんでもらいたいと、運動本部オリジナル紙芝居『やさしいこころ』の読み聞かせ動画を制作。永澤さんのYouTubeチャンネルで配信中です。

アニメ「ちびまる子ちゃん」のブー太郎役でおなじみの永澤さんですが、ブー太郎とはまた違った個性豊かなキャラクターを、一人で演じ分けてい



ます。プロの声優さんの迫力の読み聞かせを、ぜひお楽しみください。

●親切はすばらしい

「小さな親切」作文コンクールの入賞作品をもとに、手描きの紙芝居を



片亀さん手作りの紙芝居

制作し、読み聞かせボランティアをしている群馬県の片亀蔵晴さん（個人正会員）は、休校期間中の児童に紙芝居を楽しんでもらうため、玉村町立上陽小の依頼を受け読み聞かせ動画の撮

影に挑みました。それから、3本の動画を配信した片亀さんは、子どもたちの豊かな心の成長を楽しみにしています。

きました。長期間の休校により家で過ごす時間が増え、生活リズムが乱れ気味になってしまった児童生徒たち。学校再開後、まずは明るく元気なあいさつで一日のスタートを切りたいと、あいさつ運動に取り組みました。新型コロナウイルス感染防止のため、マスクを着け、ソーシャルディスタンスを保つての活動ですが、やっと登校できた喜びを胸に、久しぶりに会う友達との心の距離を縮めた

いと各校がんばっています。

●新作絵本は『アマハゲ』がテーマ

天地間のペンネームで、民話絵本を制作している山形県酒田「小さな親切」の会の前田直己代表は、2作目となる「アマハゲ物語」を書きあげ、酒田市や遊佐町に寄贈しました。遊佐町の「アマハゲ」は秋田の「ナマハゲ」によく似た、五穀豊穡を願い怠け者をいさめる行事で、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。



前田代表（左から2番目）より、酒田市の村上教育長へ寄贈



絵本は、時田博機町長の子どもたち

ちにアマハゲを知ってもらいたいとの制作要請に応えたもの。道徳心や思いやりの心の大切さを伝える内容となっており、「読み聞かせにも活用してもらい、親子の絆を深めてもらいたい」との前田代表の希望が込められています。問い合わせは北星印刷（0234-221-3922）まで。

●ラジオで心が癒される

絵本セラピストとして読み聞かせなどの活動をする金子明子さんが、誰もがラジオ番組のように音声を配信できるアプリ「Stand.fm（スタンドエフエム）」で、はがきキャンペーンの作品が収録された『涙が出るほどいい話』（河出書房新社発行）の心あたたまる作品を配信しています。

人との距離を保たなければいけな

い今だからこそ、「心の距離を近づけたい」と語る、金子さんの穏やかな声は、日々の不安を和らげてくれるようです。耳を傾けてみてはいかがですか。番組名：心ほっこり読み語り

【道府県本部新代表就任】

（2020年4月～7月／敬称略）

福島県本部 佐藤 稔

（東邦銀行取締役頭取（代表取締役）

栃木県本部 黒本 淳之介

（栃木銀行取締役頭取（代表取締役）

【寄附金ご芳名】

（2020年4月～6月末／敬称略・順不同）

青森県 似鳥初彦／群馬県 片亀蔵晴

／東京都 正田喜代松／山口県 久永

智恵子／福岡県 宗教法人南蔵院

おとなの作文

「落選させてくれてありがとう」

千葉県 石井美希（19歳）

私は小学校2年生から11年間、書道が続いている。だがその11年間、スムーズに続けてこられたわけではない。中学2年生のころ、壁にぶつかった。その壁を与えてくれたのは私の恩師である、国語のK先生であった。

小学生の頃の書道の成績は、「中の上」。クラスの代表として市の展覧会へ出品したり、県の書き初め展覧会では、地区審査最高賞を受賞した。しかし、中学生になると様子が変わった。市の展覧会へ出品できるのは、学年で4人。学年代表を選ぶのは、国語のK先生だ。

「私が選ばれるのでは？」結果が楽しみだったが、学年代表の中に、私の名前は無かった。小学生のときから、一度も落選することがなかった学年代表。当時は中学2年生。思春期と重なり、「書道を辞めたい」と初めて思った。

冬になり、市の美術館で書き初め展覧会が開かれた。学年代表は4人。前回の悔いを晴らすため、強い気持ちで練習に励む。自分のベストを尽くした1枚が決定した。この作品が、市の美術館に展示されることを頭の中に思い浮かべた。今回は自信があった。

しかし、K先生が審査を行った結果は「落選」であった。そして、小学生のころ地区審査最高賞を受賞した県の書き初め展覧会も、下から2番目の賞となってしまった。もう、書道を続けていく気持ちにはならず、私の気持ちが間接的に伝わったのか、中学3年生の5月、先生の都合で書道塾が閉まってしまった。

高校生になり、気軽な気持ちで書道部に入部した。新しい書体、古典の臨書や創作など、新しいことに触れることができた。2年生の後半から部長を担当し、たくさんの書道展覧会へ出品すると、上位の賞へ入賞したり、新聞に名前が掲載されたりと自信がついてきた。

3年生になると後輩も増え、気軽な気持ちで入部した書道部だったが、「書道」は生涯続けていきたいものへと変化していった。

大学生になった現在は、市内の書道塾へ通い、毎月配布される競書冊子ではたくさんの課題へ挑戦したり、書道展覧会へ個人出品したりと、結果だけにこだわらず、楽しく書道が続けている。うまく書けない時には作品をじっくり見つめなおし、ゆっくりと筆を運んでいる。

もしも中学2年生のとき、K先生が私の作品を落選させていなかったら……。高校で書道部に入部することも、現在まで続けていることもなかったと思う。

今年2月、K先生に再会した。その際、「落選させてくれてありがとう」とお礼を言った。今日私は、一字一字に想いを込めながら筆を運ぶ。その思いの一つは、K先生への「ありがとう」。